身心変容技法研究会2017年度研究分担者研究計画2017年4月28日確認

1. 2017年度の研究計画　鎌田東二

**全体計画**

本科研も第一期（2011年度～2014年度）と第二期（2015年度～2018年度）を含めると、丸6年が過ぎ、7年目の節目に入った。「身心変容技法」や「身心変容」という概念を通して、宗教と芸術と武道・スポーツ・技芸などを串刺しする視角を設けつつあると思っているが、その負の側面にいっそう焦点を合わせ、その全容を立体的に解明し、混迷する現在の精神界に寄与したい。具体的には、次のような問題点をさらに考察していきたい。

**2017年度の個別計画**

①　身心変容技法と霊的暴力の総合研究

②「悪魔」論（継続）

③オウム真理教事件の究明とオウム真理教における身心変容技法と霊的暴力の問題

④法輪功事件の究明

⑤トランスと洞窟体験と身心変容技法の関係の追求、世界の洞窟聖地のフィールドワーク

⑥神楽および能・世阿弥研究

⑦修験道研究

⑧グノーシス主義研究

⑨沖縄・久高島の儀礼と世界観と聖地研究

２、本年度（2017年度）の計画　鶴岡賀雄

　なかなか正面から扱えなかった「悪魔」の問題に、本年度は取り組みたい。

　「悪魔」は、キリスト教（など）での「悪」の形象化、人格化だが、唯一神の「全善」性と「全能」性を両立させるなら、悪は「存在の欠如」、つまり「無」であり、悪も悪魔も「存在」しないはずである。理論的にはそうであるにも関わらず、キリスト教の歴史の中では、悪も悪魔も拭いがたいリアリティをもって「存在」し続けてきた。

唯一神の「一元論」と、にもかかわらず生み出され続ける「二元論」――「存在と無」「善と悪」の二元論を含む――の関係を、悪・悪魔のリアリティがどう感じられ語られてきたかについて着目することで、いささかなりとも解きほぐしたい。

その際、この科研のキーワードになっている、「暴力」をどうとらえるかが重要になると思われる。

上記の問題を扱って、とくに中世から近世にかけての題材――トマス・アクィナス、カタリ派、スュラン、ベーメ・・・――を用いて、年末までに論文を仕上げる予定。

　―――初年度以来の問題関心は変わっていないのですが、西洋（宗教）思想のこの一大難問について、なにか実質的なことが言えるとは思っておりません。はっきりした見通しが立っているわけでもないのですが、漠然と考えていることになんとか形を与えたいと念願しております。今年も年度初めに大言壮語して、自らにプレッシャーをかけておきます。ちなみに、私個人としては、この西欧的一神教の「悪・悪魔」の位置づけに、全面的に共感したり納得しているわけではありません。その違和感自体の由来もはっきりさせたいです。

　もう一つの課題は、研究会、シンポジウムにできるだけ出席することなのですが、今年は私の大学での最終年度で、責務任務残務が多々あって、どうなりますか不安です。

ともかく、泣き言言わずがんばります。

はなはだ簡潔ですが、本年度の活動計画といたします。

３、アトモスケープ論――身体境界の溶解と内外融合（2017身心変容技法研究会）津城寛文

折口鎮魂説が「アトモスケープ」論にどう接続するか、おおまかな見取り図を描いてみたのを受けて（津城寛文「折口鎮魂説から「アトモスケープ」論へ」『現代思想　総特集　折口信夫』42-7、2014）、アトモスケープ論をさらに展開してみたい。

「雰囲気の景観(アトモスケープ)atmoscape」とは、日本オリジナルというより、端的に私の造語で、「音の景観(サウンドスケープ)」という音楽（教育）用語を直近のヒントとし、「匂いの景観(アロマスケープ)」という商業用語を経由し、五感すべてとその基盤に関わる景観認知のモードとして、不器用・不格好ながら、提案してみたものである（津城寛文『日本の深層文化序説』1995）

「日本の原始信仰に於て、先第一に言はねばならないのは、たましひの問題である」という霊魂への関心を折口学の大前提とした時、そのつぎに来る種々の問題を、折口は疑いもなく「鎮魂」の語を軸に考えていた。「歌はすべて、たまふり――鎮魂――の目的から出てゐた」「鎮魂といふことがわからなければ、神道がわからない」と、繰り返し宣言しているとおりである。この前提にあるのは、何よりも、身体内外の非物質的あるいは半物質的流動体が、不安定に運動する、という実感である。

　近代詩人である釈迢空の短歌にも、このような動揺感や不安感を前提とするものが、少なくない。しばしば指摘される「かそけさ」「さびしさ」といった漏洩感や希薄感、また「死」や「水」への傾斜は、鎮魂説と無関係ではない。この漏洩感・希薄感・流動感は、確固としてあるべき身体の境界が透過的になった状態を表わしている。動揺感や不安定感は、身体境界が日常的な固い状態から、透過的になっていく液化のプロセスを表わすものにほかならない。そのような動揺は、健常な人では時々しか起こらないのに対し、折口のような透過性の高い人においては、頻繁に起こるか、あるいはそれが常態となっている。

意識の流動性が高まり、したがって身体の透過性が高まり、意識と無意識、主客、内外、生死、明暗、悲喜、といった分節・境界が溶解し、剥き身のような生々しい状態になってはじめて、世界の限界的な次元に触れることができる。少なくともそのような接触の予感がなければ、限界は話題にすらならない。そのような限界に無媒介に触れるため、意識や無意識、生理や身体を操作するのが、近代詩作の方法だったのである（津城寛文『折口信夫の鎮魂論』1990）。

　このような方法によって内外が融合したとき、そこに描かれてくるのは、主客が分離した情景ではあり得ず、必ずやアトモスケープ、雰囲気の景観になるのではないかと思われる。古代の万葉歌から、中世の玉葉集、近代の迢空短歌、現代の和歌まで、例となり得る歌の解説を軸に、アトモスケープを論じてみたい。

４、2017年研究計画　関西学院大学　倉島哲

本年度は、中国河南省新郷市とイギリス・マンチェスターの太極拳教室の調査を継続しつつ、二つの方向で研究を発展させたい。

第一に、太極拳と現象学的身体論の接点を探ることである。メルロ=ポンティの身体論は、西洋近代の合理主義的人間観を覆した点で重要であるが、これをもって、彼の思想が東洋的行法の思想と親和的であると結論することは、やや飛躍があるように思われる。

プラグマティズムの立場から身体美学を唱えるシュスターマンの指摘するように、メルロ=ポンティは、生きられた身体の非人称性・前意識性を重視するあまり、この身体に対して反省的意識が向けられる事態を、生きられた身体の知覚-運動機能の喪失としてしか捉えていない。他方で、シュスターマンは、ヨガや瞑想などの東洋的行法、ならびに、アレクサンダー・テクニック、フェルデンクライス・メソッドなどを「身心訓練制度（somatic disciplines）」と名付け、これらの領域においては、身体に対する反省的意識は、よりよい身心の働きをもたらすための重要な手段であると論ずる。たとえ、反省的意識ゆえに身体の知覚-運動機能が一時的に停止せしめられようとも、それは弁証法的に克服されるべき中途段階にすぎないのである。

他方で、東洋的行法の重要な一角を占める武術は、シュスターマンのいう身心訓練制度には認められない性質を持つ。現代において武術は、日常的行為における身心の機能をよりよくするために修練されることも多いが、武術本来の目的は、対敵状況における身心の機能をよりよくすることだからである。したがって、武術は、生きられた身体の意識的反省によってその日常的機能を一時停止させる点では身心訓練制度と同じであるが、その先に、武術的に特化した身心の機能を求める点で異なっているといえる。したがって、武術という観点から太極拳を考察することで、シュスターマンの行ったメルロ=ポンティ批判とは異なった角度から、東洋的行法とメルロ=ポンティとの接点を探ることができるように思われる。

第二に、太極拳と公衆衛生との接点を探ることである。身心変容技法を歴史的に検討したとき、経済的・時間的余裕のある限られた少数者がこれを継承し、発展させてきた場合が少なくない。だが、最近になって、ヨガや気功などの技法を、大規模災害の被災者および援助者のケアに応用しようとする動きがあり、2004年のスマトラ島沖地震による津波や2008年のビハール州洪水における実践事例をはじめ、数多くの事例報告がある。これらの報告においては、限られた人的資源および設備のなかで、できるだけ短時間で効果を出すために、技法の簡略化やアレンジがなされていることは注目に値する。

こうした観点からすれば、1956年の簡化二十四式太極拳の制定は、少数者により継承されてきた身心変容技法の簡略化による公衆衛生への応用という点で、先駆的な業績であるといえる。また、マンチェスターの太極拳教室も、高齢の中国人移民のニーズに応えるために、陳式太極拳を簡略化した8式太極拳を教えている。太極拳の簡略化による公衆衛生への応用にともなうメリットとデメリットを、経験的データに依拠して示したい。

５、研究計画書　井上ウィマラ　（高野山大学）

全体計画：

　身心変容技法における負の感情処理・浄化法や霊的暴力というテーマについて、人間関係における上下の力学が負の感情や暴力パターンの解消にどのような影響を与えるかという視点を中心にアプローチしてみたい。そのための基盤として、まずはマインドフルネス瞑想に関する総合的な経典である「念住経(Satipatthāna-sutta)」における五蓋と呼ばれる負の心理作用についての観察法と律蔵に記載された師弟関係における義務の特徴をまとめる。

次に、D.スターンの情動調律(affect attunment)やR.エムディの感情的応答性(Emotional availability)という概念を介して母子間の情動的な響き合いに際してどのような姿勢で臨むことが乳児の負の感情処理のための発達促進的環境としてふさわしいのかについてまとめる。また、こうした研究の先駆けとなったD.ウィニコットの「思遣りをもつ能力の発達」に基づいて乳児の攻撃性や罪悪感という原初的な不安がどのようにして思いやりに変容されるかについての考察をまとめ、その臨床的な応用例としてS.フライバーグの「赤ちゃん部屋のお化け(Ghosts in the nursery)」を取り上げて、多職種チームによるアウトリーチ型の母子支援について概観する。このようにして、適切な養育環境に出会うことができなかったために思いやりへと変容されることのなかった罪悪感がうつ状態や衝動的な暴力パターンを生み出す現状に対する具体的な対応法が明らかになろう。

さらに、A.ミンデルのランク(rank)という概念を援用して、上下関係という力の差を自覚的に使うことでお互いが楽になるような関係性や場の促進法についてまとめてみたい。

以上のようなアプローチの中で、母子関係から刑務所における矯正教育に及ぶ広範な領域において上下の力関係を自覚的な器として行使することによって、暴力的な負の感情パターンが解消されてゆく可能性について包括的なビジョンを提示することを目標とする。

2017年次計画：

　本年は、ジョアン・ハリファックス老師が開発した医療者の燃えつき防止プログラムGRACEについて、律蔵「大品」に記載されている出家修行者の相互看病の実践と比較しながら考察してみたい。GRACEはマインドフルネスと慈悲の瞑想を基盤としており、医療者が臨床現場で実践できるようにコンパクトな５つのステップにまとめられている。そこで行われる瞑想的内省は、自らの価値観の根源に立ち返って道徳的な基盤を養い、身体、情動、思考という３つのレベルで自他を見つめることによって認知の歪みを修正し、自分が完璧であり得ないことを許すことで常に目の前の現実に対応できる準備を整えてゆく。また、GRACEの拠り所としている脳科学的研究のありようと伝統的仏教の教えとがどのように一致しているのかも検討してみたい。こうした作業をお通して、負の感情がどのように浄化され、自他を大切に思う行動へと変容してゆくことが可能なのか、その過程を明確にしてみたい。

　また、「コンステレーションを読む」「呼吸のキャッチボール」など独自に開発してきた瞑想的エクササイズに関して、ビデオ研究や感想の質的研究を通して、その心理学的な機序についての研究を始めてみたい。

６、研究計画書（2017年度）永澤哲

　今年度は、チベット仏教およびチベット医学における、体・生命イメージについて、文献および現地調査の両面から明らかにすることを目指す。特に①識論②身体と感情の関係③精神の健康と悟りの三つのポイントを中心に、考察を進める予定です。従来扱われてこなかった、チベット女性の聖者伝を重要な資料の一つとして用いる予定。　　以上。

**７、平成29年度 研究計画　野村理朗　京都大学 大学院教育学研究科**

**平成28年度までの成果**

1. **「畏敬の念」**を喚起する映像視聴中に，見知らぬ人物の「怒り顔」をランダムに提示する実験操作により，これに伴う自己の縮小の程度と，攻撃行動の強度との正の相関関係を見出した。これは畏敬の影響が大きいほど，特定の条件下で，攻撃性が高まる可能性を示唆する結果である。これに加えて重要なこととして，かりに畏敬の念が喚起されたとしても，先行して怒りの刺激が提示されると，攻撃行動との相関性が非有意になることもわかった。怒りの矛先が当事者ではなく，これとは関連のない先行事象に向く（帰属される）ということである。すなわちある種の“ワクチン“として，1) 先だって怒りの帰属対象をもうけることにより，来たる攻撃行動，ないしそのトリガーとなる怒り感情を緩和できること、2) 怒りの帰属対象が，本来自身の怒りの源泉となんら関連のない場合であっても，そちらに転化される可能性を明らかにした。
2. **「二種の瞑想」**の神経基盤を解明するために、瞑想実践者12名(女性5名, 平均年齢30.3, 平均瞑想実践時間741.7h)を対象として、瞑想条件(集中瞑想，洞察瞑想)とタイミング条件(瞑想前安静時，瞑想時，瞑想後安静時)の参加者内2要因で、MRI装置を用いて、各6分の脳活動を測定した。その結果、集中瞑想では、瞑想時に、腹側線条体と注意の切り替えに関わるセーリエンスネットワーク領域との結合性が上昇し、同じ腹側線条体と現在の自己参照に関わるデフォルトモードネットワーク領域との結合性が低下した。これに対して、洞察瞑想では、瞑想時に、被殻と、過去や未来の自己参照に関わるデフォルトモードネットワーク領域との結合性が低下した。さらに、右背側被殻吻側部と右脳梁膨大後部皮質間の結合性の低下は、瞑想後にも持続していることを見出した。

**平成29年度の研究計画**

1. 畏敬は，寛容性をもたらす一方で，外集団への懲罰動機を強め，対決姿勢を促進し，紛争の発生・激化の一因となりうる可能性が示唆された。今後は、そうした過程にかかわる様々な心理特性について，例えば気質，認知，態度・信念（政治的態度，信仰心）等）の影響について細かやかに検討する。
2. 平成28年度までの成果を受けて、引き続き、集中力を高める集中瞑想と、平静さを高める洞察瞑想の神経基盤の解明と、それらの神経基盤の解明のためのMRI実験を実施する。現時点でのサンプルが12名であるため、継続してデータを収集するとともに(研究1)、同じく、瞑想者を対象として、感情喚起時に、感情に対して集中瞑想と洞察瞑想が及ばす神経活動の影響についてMRIを用いて検討する(研究2)。

８、研究計画書　東京大学医学部付属病院　循環器内科　稲葉俊郎

１　全体計画（2015~2019）

　現代医療を見渡すと、現在主流である自然科学をベースとした西洋医学だけでは不十分であることは認識されている。ただ、医療現場において様々な伝統医療や補完代替医療（Complementary and Alternative Medicine：CAM）、統合医療は実践されていないのが現状である。その理由は様々挙げられるが、伝統医療や補完代替医療の正の側面も負の側面も正しく認識されていないことが原因の一つと考えられる。身心変容の技術は正しい方向に使用すれば未来の医療における可能性を持つが、誤った方向に使用すると霊的暴力となり危険性へと変化する。身心変容技法を多角的に捉えることで、未来の医療に適切に応用していくことを目的とする。

２、2017年度研究計画

世界の医療の歴史を広い視点で見直しながら、日本の医療の歴史を再度検証してみる。日本最古の医書「医心方」をはじめとして、いまだ医療の歴史の中でとりあげられていない心や身体にまつわる重要なテーマが多数ある。「医心方」は平安時代の宮中医官、鍼博士である丹波康頼が編集した医学書だが（984年）、槇佐知子氏が四十年かけて現代語訳するまで、この書物は一般の目に触れられることはなかった。この医書は中国医学の編集ではなく、当時の全ユーラシア的な知識をまとめた医学全集である。ちくま書房から全30巻全33冊がすべて出版されたのは2012年であり、いまだ現代西洋医学との関連で述べられていない。日本の古典医学書として最重要文献である「医心方」再検証しながら、未来と古代の医療との連続性を持った歴史観と提案を考察する。

９、古谷寛治「分子生物学から学ぶフィードバック制御による身心変容」

私たちの細胞は増殖するため複製と分裂といったイベントのサイクルを繰り返す。また、我々の社会における祭事も季節に応じたサイクルでもって繰り返される。ただ、細胞増殖は常に円滑にこれが行われるわけではなく、放射線や紫外線のようにゲノムDNAを傷付けるようなストレスをうけると、一旦その増殖サイクルを停止させ、傷の回復を待つ。すなわち細胞にはゲノム上の傷を検出し、「細胞分裂サイクル停止シグナル」を発動する仕組みが備わっている。

その一方で、一旦分裂サイクルを停止させた細胞は細胞分裂をできる限り早く回復しなければならず、分裂停止をしなくてもいい程度の傷であればやり過ごすことで円滑に細胞分裂サイクルをまわすことを優先させることも予想されていた。我々のこれまでの分子生物学的な成果により、細胞には「細胞分裂停止シグナル」を抑え込む「抑制フィードバック」の仕組みが備わっていることを明らかにしてきた。また、その抑制システムががん細胞によって悪用され、細胞増殖の暴走が引き起こされることを見出してきた。本研究課題においてはこれらの分子生物学的結果と、その仕組みの人間社会における営みとのアナロジーについて議論する。

2016年度には、人と人とのつながりの緊密さが抑制機構の原動力となるとの仮説を立て、細胞内のタンパク質ネットワークとのアナッロジーの可能性を論じた。また、その人のつながりの希薄さが地域社会における暴走をもたらすとの考えも提示した。2017年度においてはさらに一歩踏み込み、より定量的にモデルを構築し議論したい。

１０、「身心変容技法と霊的暴力」研究計画書　　島薗進

（１）2016年度は、現代の学校の入学式・卒業式等で日の丸に礼拝し、君が代を歌うことを強制することを耐えがたいと感じ、それに抵抗したために処分された学校教員の訴えを例に、この問題を現代の国家的暴力の顕著な事例として考察した。これは、国家の意思に抗することなく、画一的な集団的行動に従い、命令＝服従の上下関係を受け入れることを強いる身体変容技法として用いられているものである。集団的な規律訓練を通して、従順な心身を形作る技法は、近代世界に広く見られるものである。明治維新後の日本においては、学校において天皇崇敬を吹き込むことが強力に行われたが、その際、教育勅語と御真影が中心的な役割を担った。戦後、教育勅語と御真影は排除されたが、学校で儀礼を通じて国家主義的で画一的な集団行動の規律訓練を行うシステムは、なお好まれている。日の丸への礼拝と君が代斉唱がその重要な担い手として機能してきたことを明らかにしようとした。

（２）前年度に続いて2017年度は、日の丸への礼拝と君が代斉唱に代表される学校の画一的身体変容技法が個人の自由な精神を侵害する様相について、歴史的な検討を積み重ねていく。東京都が学校儀式に導入した画一的な日の丸への礼拝と君が代斉唱は、どのような意味で教員の精神的苦痛をもたらしたのか。周到に準備された「職務命令」の形をとった日の丸・君が代強制は、「踏み絵」に似ているとも評された。教育という自らの精神を投じた仕事を支える信念として、国家神道の強制こそが戦前の日本の全体主義への道を整えた歴史を肯定するわけにはいかない。それが日の丸への礼拝と君が代斉唱を受け入れられなかった教員たちの生き方であり、そこに個人としての尊厳がかけられていた。戦前から戦後にかけての日本の国家による霊的暴力と身体変容技法のあり方を究明することは、日本の宗教伝統、文化伝統における霊的暴力と身体変容技法の特徴を理解する上で大きな意義をもつだろう。2016年度からとりかかった作業であるが、次第に資料が集まってきており、今年度は一段と深い次元へと踏み込んでいきたい。

１１、「心理療法におけるこころのワザ学、および身心の変容を引き起こす力とその感染力との関わりの研究」河合俊雄

今年度は、3つの研究を計画している。

1. 心理療法における霊的暴力との関わり方の研究

　これは昨年度に引き続き、心理療法を受けにきたり、あるいはそこに連れてこられたりするクライエントにおいて、霊的暴力がどのような形で生じているのか、また家族などの周囲との関係でどのようにその脅威にさらされているのか、また避けているのかを分析したい。

　方法としては、事例研究のメタ分析で、河合、田中康裕が主催する事例検討会での発表事例に基づいて研究を進める。

　昨年度まででは、否定的なものによって苦しんでいるクライエントが、それを積極的に克服しようとするよりは、むしろ否定的なものにとどまり、そこからの発展を避けているようなメカニズムが多く認められるた。今年度も事例を増やしつつ、この方向性が確かなものか確認しちあ。

1. 東洋における精神性（特に仏教）の変遷と心理療法の関連

　インドで生まれた仏教は、中央アジアを経て、中国、韓国、日本へと伝わるうちに変遷していき、それにはそれぞれの文化や心理の特徴が関係している。それの変遷と、現代における心理療法との関連を、実際に中国、台湾、韓国での事例研究会を行う中で比較検討したい。

３．『こころのワザ学：宗教と心理療法』

　心理療法はこころのワザ学であるが、非常に特殊なワザ学である。その特徴を、鎌田東二氏が宗教の立場で、河合が心理療法の立場から検討することで、明らかにしていきたい。

★参考：昨年度（2016年度）の研究計画書

１、「身心変容技法と霊的暴力」研究計画書　　　　　　　　　　　永澤哲

１　全体計画（2015~2019）

　4年間の研究期間中、チベットをはじめとするアジア、およびそれ以外の地域の霊的伝統において伝承されてきた身心変容技法について、それを支えてきた環境・文化・社会的コンテクストはいかなるものだったのか、また現代における発展、変容、変質を明らかにすることを目指す。

２、2016年度研究計画

　　2016年度は、以下の二点を中心に研究を行う。

1. 倍音声明瞑想の科学的研究（音響学）

高次倍音発生のメカニズムについて音響学の実験を継続するとともに、さらなる理論的究明を行う。また、癒しの臨床における適用の可能性、禁忌について考察する。

1. アジアの仏教、聖地、医学の研究

アジアの仏教、聖地、医学およびその現代的展開について、おもに比較の観点から研究する。

２、鎌田科研：「身心変容技法と霊的暴力－宗教経験における負の感情の浄化のワザに関する総合的研究」についての、活動計画（２０１６年度）　鶴岡賀雄

（１）昨年度は、十六世紀スペインの神秘家十字架のヨハネの「魂の暗夜」についての論考を作りましたが、不十分なままでした。本年度は、これを補いつつ、完成させます。

（２）昨年度から予定していた、十七世紀フランスのイエズス会士ジャン=ジョゼフ・スュランの有名な悪魔体験について、再検討したいと思っています。スュランについては、二十年以上前に読んで、論文を書いたことがありますが、その後フランスでの研究が大きく進み、新たな校訂版が多く刊行されていますし研究書も増えました。それらを踏まえて、キリスト教の伝統の中で「悪魔・悪霊」とは何なのか、考えを深めたいです。ちなみにスュランは上記の十字架のヨハネの教説から大きな影響を受けています。

（３）「負の感情」、というある意味で個人的なレベルの考察から、「霊的暴力」という、より一般的な問題に考えを進めたいのですが、それは、宗教の領域では、悪魔といった神話的形象を用いて思考されてきたと思われます。リクールの古い研究が参考になります。私的勉強会で少しずつ読んでいるカタリ派のテクストを足場に、神話的形象が形而上学的原理としてとらえなおされていく経緯を探りたいです。

　これは、抽象的に言えば「悪の還元不可能性」といったところに行き着くと思われますが、この抽象的なレベルから現代の具体的な問題になんとかたどり着きたい、というのが最終目標です。実現可能性は差し置いても、目標を掲げておくことだけでも意味があると思って書きました。

３、オーウェンの知られざる霊的側面に光を当てる　　津城寛文（筑波大学）

　ロバート・オーウェンについて、平均的な読書人の知識は、社会改革者、空想的社会主義者にして、晩年はスピリチュアリズムへの回心者、といったところである（ウィキペディア、日本語、英語）。海外での研究状況については、まったく見通しがきかないが、日本の学術的なオーウェン研究については、五島茂が、文献その他の資料整理、『自伝』その他の紹介翻訳、そして基礎研究をリードしてきており、私見では、そのやや偏った作業によって、一面的なオーウェン像が構築されているように思われる。

　「偏った」というのは、初期の社会改革思想から「晩年のスピリチュアリズムへの回心」が、全面的に否定的なものと捉えられていることと、それ以前に、翻訳紹介の段階で、作品の偏った取捨選択があり、さらには独立した作品において、大幅な削除があること、である。

　一人の思想家には、「回心」とまでいかなくとも、一般論としても、多面的な思想があり、研究者（読み手）の立場、視点から、それぞれの価値評価をするのは、当然のことである。しかしそうした多面的な文書を、翻訳紹介作業の段階から、一定の意図で取捨選択、削除編集するのは、基礎作業として、説得性、公平性に欠けるところがある。論争のあるテーマについて、批判、評価する場合、何を否定し何を評価しているのか、まずは判断材料を偏りなく示し、主張に有利な材料も不利な材料も、広く提供する必要があるだろう。とくに、重要な思想家の場合、重要度に応じて、文書が、草稿やメモを含め、網羅的に収集されるのが通常である。その意味で、英文のオーウェン著作集四巻は、かなり網羅的である。

　最後の運動機関紙、一八五六年から死去する五八年までの「至福千年期新報Millennial Gazette」について、翻訳紹介者の五島が、「心霊主義的傾向が濃い。彼がいかに本誌に執着してゐるかは自叙伝の序の対話でも瞭らかだ」と述べているとおり、自叙伝と心霊主義を切り放そうとするのは、無理がある。しかも、オーウェンの社会的ビジョンは、初期から晩年まで、驚くほど一貫しており、断固としてシンプルである。一九世紀の後半、「多くの社会主義者がスピリチュアリストだった」のは間違いなく、この観察を無視しては、社会主義の要点は見失われるだろう。私はオーウェンの一貫性ある自己理解に沿って、オーウェンを理解したいと思う。

　同時代者、弟子たちからも批判されて、オーウェンの「心霊主義的傾向」を示す「自叙伝の対話」その他の未邦訳部分を抄訳し、議論のための材料を提供したい。

４、鎌田東二

①　オウム真理教事件の究明とオウム真理教における身心変容技法と霊的暴力の問題

1. 法輪功事件の究明
2. 洞窟体験と身心変容技法の関係の追求、また世界の洞窟聖地のフィールドワーク
3. 世阿弥の「申楽」研究と談山能の見学と研究
4. 修験道研究
5. 「魔」あるいは「魔境」あるいは「悪魔」の研究
6. グノーシス主義研究

５、2016年4月15日　身心変容技法と霊的暴力　2016年度研究計画　倉島哲

基本的には、『身心変容技法研究５』で考察したマンチェスターの太極拳教室のフィールドワークを継続したい。今年度は、特に次の点に着目する。

・高齢の中国系住民のための福祉政策の一環としての無料の太極拳クラスが３クラス開催されているが、マンチェスター市による援助は昨年度で打ち切られてしまった。今後は有料のクラスになる予定である。

・通常の一回５０分で６ポンドのクラスには、高齢の中国系住民はほとんど参加していない。そのため、高齢者福祉の目的で料金を３ポンド、あるいは２ポンドに割り引いたとしても、どれほどの参加者が見込めるかは未知数である。

・マンチェスター市と太極拳教室の間を取り持つのは、Chinese Health Information Centreという福祉団体である。この団体の代表者は、英語を話せないために各種のコミュニティ活動に参加できず孤立している中国系高齢者にとって、太極拳はもっとも文化的に適切(culturally relevant)な運動であると述べている。

・しかし、当の中国系高齢者の間では、太極拳は身体に良いことはわかっているが、お金を払ってまでするものではないという観念が根強いのではないか。

・武術として中国内陸で発祥した太極拳は、現代イギリスにおいて保健活動として再創造されている。このプロセスは、中国人の太極拳をイギリス人が受容する、という図式で理解されがちであるが、イギリス在住の中国人の存在を考慮する必要がある。中国社会における太極拳の位置づけ（無料のコミュニティ活動）と、イギリス社会のなかでの位置づけ（有料のクラス）の齟齬をどのように解消しているかを考える。

・太極拳とはこういうものだ、という文化的に共有された観念が高齢者の太極拳クラスへの参加を阻んでおり、それが結果的にQOLの低下につながるならば、この観念はある種の霊的暴力であるといえるかもしれない。中国在住のさいは問題のなかったこの観念が、イギリスでは問題になるならば、霊的暴力は社会文化的コンテクストに依存しているのだろうか。

６、研究計画書　林紀行（大阪大学大学院医学系研究科統合医療学寄附講座）

全体計画：

　昨年度は身心変容技法における負の感情処理・浄化法や霊的暴力というテーマについて、統合医療の観点から考察するとともに治療抵抗性慢性疼痛に対する統合医療的アプローチという臨床試験を計画した。

　今年はこの臨床試験を実施しそれを報告するとともに、ホスピスにおける緩和ケアに対して身心変容技法における負の感情処理・浄化法や霊的暴力を考察してみたい。

　緩和ケアは痛みや不快感に対する身体的ケア、感情的な精神的ケア、人間関係などの社会的ケア、それらの範疇に収まらない本人特有の苦しみに対するスピリチュアルケアにわけられる。これまで日本の一般医療において身体的ケア、精神的ケア、社会的ケアについては一般医療の範疇で取り扱われていたがスピリチュアルケアについて扱われることは少なかった。これは日本人のスピリチュアルケアへの注目の低さもさることながら、歴史的背景から宗教的とも捉えられるものを公的な場で扱うことの困難さも関係している。

　近年GRACEプログラムが日本でも開催され、医療従事者の注目を集めている（ <http://bwdj.org/> ）。マインドフルネスによる終末期ケアとも訳されるこのプログラムは仏教哲学を根本に設計されているが仏教徒でないものも扱えるように工夫されている。このプログラムは医療従事者の燃え尽き症候群の防止にも繋がるとされており、スピリチュアルの理解にも繋がりうる。

　今回GRACEプログラムに参加し、それを実際にホスピス業務に適応する臨床試験を計画する。それを元に臨床試験を行い日本におけるスピリチュアルケアの構築を図る。

　２０１６年次計画：

　「治療抵抗性慢性疼痛に対する統合医療の実施可能性に関する検討」と題して大阪大学医学部附属病院にて臨床試験を施行、結果をまとめる。

　「GRACEプログラムに基づく介入によるホスピスにおける燃え尽き症候群防止とスピリチュアルケアの構築」と題してホスピス病棟にて臨床試験を施行、結果をまとめる。

７、「身心変容技法と霊的暴力」研究計画書　東京大学医学部付属病院　循環器内科　稲葉俊郎

１　全体計画（2015~2019）

　現代医療を見渡すと、現在主流である自然科学をベースとした西洋医学だけでは不十分であることは認識されている。ただ、医療現場において様々な伝統医療や補完代替医療（Complementary and Alternative Medicine：CAM）、統合医療は実践されていないのが現状である。その理由は様々挙げられるが、伝統医療や補完代替医療の正の側面も負の側面も正しく認識されていないことが原因の一つと考えられる。心身変容の技術は正しい方向に使用すれば未来の医療における可能性を持つが、誤った方向に使用すると霊的暴力となり危険性へと変化する。身心変容技法を多角的に捉えることで、未来の医療に適切に応用していくことを目的とする。

２、2016年度研究計画

1. 世界の医療制度を調べながら、様々な身心技法が未来の医療として調和できる社会のモデルケースを考察し、提案する．
2. 日本最古の医書「医心方」をはじめとして、医療の歴史を調べる。その中で身心変容技法の正の側面、負の側面がどのように扱われたかを検証しながら、未来の医療にどのように適応されていくかのモデルケースを考察し、提案する．

８、研究計画書　金香淑（目白大学前准教授・京都大学こころの未来研究センター連携研究員）

2016年度研究計画

韓国の巫俗における「治病クッ」を取り上げ、治病の過程で見られる身心変容技法と虐待や暴力の問題について考察する。

巫俗では、病を①不浄なるものや煞、神・雑鬼が人間の身心に入り込んで引き起こされる、②人間の不謹慎な行為により神や祖上の怒りを買い、その罰として病気になる、と考える。したがって、病の原因となった存在を患者の身体から除去するか、神や祖上の怒気をなだめる必要があり、神たちの機嫌を取ったり、ご馳走でもてなしたりするために「治病クッ」を行う。しかしその過程で、治病行為と称して棒で身体を叩いたり、刃物で刺したりする暴力も少なくなく、けがを負ったり、死に至る事件が発生することもある。また、治病クッを名目に高額な費用をだまし取ったりすることも珍しくない。

このような治病クッの過程で表れる身心変容技法と、負の側面である虐待や暴力問題について、実地調査等を行い具体的に調査・分析する。それを通じて、韓国の伝統的宗教である巫俗が現代韓国における社会的病理をどのように解決し、癒すのかを考察する。

９、身心変容と霊的暴力　２０１６年度研究計画　島薗　進

1. 国家神道が日本の住民に及ぼして来た「規律訓練」の歴史的変遷について考察する。とりわけ、軍隊が人びとの身心変容をどのように押し進めてきたかについて検討していく。
2. 軍隊における儀礼的要素とその歴史、その文化的影響源、そしてその効果について考察する。とくにそれらが暴力的傾向を帯びるようになったのはどうしてかについて考察する。
3. 天皇のためにいのちを捧げるという考え方が、どのように取り込まれ、成長し、やがて猛威をふるうようになっていくか。靖国神社や特攻の歴史を通して考察する。
4. 日清、日露戦争からアジア・太平洋戦争に至る過程で、マスコミが国家神道的な身心統御がどのように強化し、霊的暴力の傾向を広めるのに至貢献したかついて考察する。
5. 戦後の文化のなかに、戦前の軍隊で培われた霊的暴力の要素が、どのように引き継がれているか、またどのように批判的に扱われて来たかについて考察する。

１０、「身心変容技法と霊的暴力」研究計画書　野村理朗（京都大学）

1. 全体計画（研究背景）

個人・集団間葛藤の予防・解決に寄与することを大きな目標とし、心理学実験・調査法を軸として、脳画像化・賦活法（fMRI・tDCS）により、注意集中（瞑想等）や自他の認識について、遺伝子多型・修飾による個人差、および社会・自然環境（文化・風土等）との関わりをリンクさせつつ研究してきた。

2016年度は主には以下の三点について検討する。

1. 研究計画

（１）ネガティブな感情、あるいはポジティブな感情（他者への思いやり（compassion）等）が感情の制御、個人の適応、それらを支える脳内機構およびバイオマーカ（ストレスホルモン、遺伝子発現等）との関連の検討

（２）瞑想方法の差異が、心身相関および続く感情処理に及ぼす影響の検討

（３）畏敬の念が、他者への行動（攻撃行動、利他的行動等）に及ぼす影響、およびその関係を調整する心理・生物・社会的要因の検討

１１、古谷寛治「分子生物学から学ぶフィードバック制御による身心変容」

私たちの細胞は複製と分裂のサイクルを繰り返すことで増殖します。ただ、常に円滑にこれが行われるわけではなく、放射線や紫外線によりゲノムDNAが傷付いた細胞は、一旦そのサイクルを停止させ、傷の回復を待つ。すなわち細胞にはゲノム上の傷を検出し、「細胞分裂サイクル停止シグナル」を発動する仕組みが備わっている。

ただ、細胞にとって最も重要なのは増殖することであり、一旦分裂サイクルを停止させた細胞は細胞分裂をできる限り早く回復しなければならない。また分裂停止をしなくてもいい程度の傷であればやり過ごすことで円滑に細胞分裂サイクルをまわすことを優先させることもわかっている。この円滑な細胞分裂に役立っているのが「細胞分裂停止シグナル」を抑え込む「抑制フィードバック」である。

興味深いことに「細胞分裂停止シグナル」には「抑制フィードバック」が二つ備わっていることがわかり、これら二つの抑制機構は速さという観点では全く異なることがわかった。また、さらに、この二つの異なるフィードバック制御を持つというのは生物の進化のみならず、社会システム、宗教観に於いても我々の生活の営みとの共存という観点でも当てはまることが示唆された。本研究課題に於いては、それら社会におけるフィードバック制御と生命システムのもつフィードバック制御のアナロジーを紐解く。

１２、研究計画書　井上ウィマラ　（高野山大学）

全体計画：

　身心変容技法における負の感情処理・浄化法や霊的暴力というテーマについて、人間関係における上下の力学が負の感情や暴力パターンの解消にどのような影響を与えるかという視点を中心にアプローチしてみたい。そのための基盤として、まずはマインドフルネス瞑想に関する総合的な経典である「念住経(Satipatthāna-sutta)」における五蓋と呼ばれる負の心理作用についての観察法と律蔵に記載された師弟関係における義務の特徴をまとめる。

次に、D.スターンの情動調律(affect attunment)やR.エムディの感情的応答性(Emotional availability)という概念を介して母子間の情動的な響き合いに際してどのような姿勢で臨むことが乳児の負の感情処理のための発達促進的環境としてふさわしいのかについてまとめる。また、こうした研究の先駆けとなったD.ウィニコットの「思遣りをもつ能力の発達」に基づいて乳児の攻撃性や罪悪感という原初的な不安がどのようにして思いやりに変容されるかについての考察をまとめ、その臨床的な応用例としてS.フライバーグの「赤ちゃん部屋のお化け(Ghosts in the nursery)」を取り上げて、多職種チームによるアウトリーチ型の母子支援について概観する。このようにして、適切な養育環境に出会うことができなかったために思いやりへと変容されることのなかった罪悪感がうつ状態や衝動的な暴力パターンを生み出す現状に対する具体的な対応法が明らかになろう。

さらに、A.ミンデルのランク(rank)という概念を援用して、上下関係という力の差を自覚的に使うことでお互いが楽になるような関係性や場の促進法についてまとめてみたい。

以上のようなアプローチの中で、母子関係から刑務所における矯正教育に及ぶ広範な領域において上下の力関係を自覚的な器として行使することによって、暴力的な負の感情パターンが解消されてゆく可能性について包括的なビジョンを提示することを目標とする。

２０１６年次計画：

　本年は、上座部仏教によって伝承されてきたパーリ経典における悪魔について取り上げてみたい。煩悩や死の象徴としての悪魔、霊的存在としての悪魔などを整理したうえで、ブッダと悪魔、仏弟子と悪魔との対話や交流を通して、戦う対象としてではなく、ありのままに見通すことによって「私のことを知り尽くしている(すっかり見通されてしまっている…)」という言葉を残して退散してゆくパターンを通して、仏教独特の悪魔の位置づけを明確化できるのではないかと思われる。

　その上で、東日本大震災発災直後に複雑性悲嘆やＰＴＳＤの専門家たちと立ち上げたJapan Disaster Grief Support プロジェクト（ＪＤＧＳ）の活動の中で、サイコロジカル・ファーストエイドなどを基に作成された「被災地の外部から被災者を支援する皆様へ」というチラシの中で「しないほうがよいこと」として紹介されている項目を取り上げて、善意からの行動によって相手を傷つけてしまう可能性がどのような力動によって発生するのかを考察することによって、霊的な暴力が発生する過程を推察してみたい。

　さらに余裕があれば、昨年度は取り上げることのできなかった、マインドフルネスによる医療者の燃えつき防止プログラムであるＧＲＡＣＥについて取り上げ、気づきがどのようにして共感疲労を防ぎ心の思いやりを可能にするかについても考察してみたい。

１３、河合俊雄

「心理療法における身心の変容を引き起こす力とその感染力との関わりの研究」研究分担者：河合俊雄

　思春期に突然に統合失調症が発症したり、あるいは突然に膠原病などの自己免疫疾患に罹ったりするなど、心理療法で関わるクライエントは、まさに霊的暴力に直面しており、心理療法とは霊的な暴力の浄化に他ならないと言えよう。また暴力こそが人を変容させてくれるのも真実である。

　霊的暴力をコンテインして変容させるからこそ、それは心理療法の中で感染力をふるい、様々な影響を及ぼすことがある。症状がセラピストにうつることはまれでないし、セラピストが身体的な病気になることもある。また感染力はセラピストのみならず、クライエントの周囲の人間に及ぶ。さらには浄化するはずの心理療法が、霊的暴力をふるうことがある。それは本物の霊的暴力のこともあれば、治療関係によって形成されている、いわば偽の霊的暴力の場合もある。

　このような心理療法における心的な力との関わりの諸相を、心理療法の中から検討すると同時に、文学などにおけるパラレルな事象を取り上げて研究したい。

2016年度

　心理療法を受けにきたり、あるいはそこに連れてこられたりするクライエントにおいて、霊的暴力がどのような形で生じているのか、また家族などの周囲との関係でどのようにその脅威にさらされているのか、また避けているのかを分析したい。

さらには心理療法のプロセスの中で、霊的暴力がどのように変化し、それによってまたそれが家族などの周囲との関係で引き受けられ方がどのように変わっていくのかを検討したい。それにはクライエント個人の中で、身体的に生じていたものが心理的なものに変化していくこともある。またクライエントが言わば霊的暴力と取り組むことで、家族全体がよいように変化し、言わば家族内の霊的暴力が浄化されることがある。逆にクライエントがよくなることで、家族内、周囲で別の人が霊的暴力にさらされるようになることもある。

方法としては、河合および共同研究に参加してくれる田中康裕が、グループ・スーパーヴィジョンで聴く事例について、上記の視点から分析を加えてみたい。既に4月から研究はスタートしていて、最終的には約100事例を分析できるはずである。

島薗進（上智大学グリーフケア研究所所長・東京大学名誉教授/宗教学）
鶴岡賀雄（東京大学大学院人文社会系研究科教授/宗教学・キリスト教神秘主義研究）
津城寛文（筑波大学大学院人文社会科学研究科教授/宗教学・神道行法研究）
井上ウィマラ（高野山大学文学部教授・/ピリチュアケア学・仏教瞑想研究）
倉島哲（関西学院大学社会学部教授/社会学・身体論）
河合俊雄（京都大学こころの未来研究センター教授/臨床心理学・ユング研究）
野村理朗（京都大学教育学研究科准教授・認知神経科学）
永澤哲（京都文教大学総合社会学部准教授/宗教学・チベット仏教学）
稲葉俊郎（東京大学医学研究科助教/医師・循環器内科・未来医療）
古谷寛治（京都大学放射線生物研究センター講師/分子生物学）